

幕別ふるさと館

鯉より鮭がふさわしい

亀谷 隆



「アイヌの家」
アイヌ民族の住宅で、平屋構造に炉を
配置し、藁や笹などの材料で造られた。
版画・谷口二朗（札幌）

★老いも若きもボウリング

昭和27年（1952）に東京・青山で開業した「東京ボーリング・センター」が日本で最初のボウリング場といわれている。

ボウリングが大衆化したのは昭和36年（1961）ころで、サラリーマンや学生らが娯楽として流行らせ、2年後の38年には全国で51カ所が開業され、48年には全国に約3,500カ所にもなり、老いは健康のため、若きは運動のためと口にし、趣味と問えば「ボウリング」で、ボウリングをしないのは時代遅れともいわれた。

しかし、昭和50年ころには、1,500カ所ほどに激減し、北海道内でも廃業となったボウリング場が、スーパーマーケットや家具展示場となり、さらには、郷土資料館などにも転用され、かつて賑わっていたボウリング場は人影すら見えなくなった。そのひとつとして、幕別町のふるさと館がある。

★水槽での鮭はどこに戻る？

昭和53年（1978）の春先と記憶しているが、幕別町教育委員会の社会教育課長が訪ねて来られ、「町で経営していたボウリング場を、郷土資料館として転用する計画なので、整備改修について指導願いたい」との依頼であった。

そこで、町の具体的な計画について問うたところ、「ボウリング場のある場所は、町営温泉を含む台地にあり、町を開拓した時代の中心地で、その地区では鯉の養殖をやっているの、開拓の歩みを示すと同時に、淡水魚の水槽をも設備したい」とのことであった。

いずれにしても、現地を調査することにし、千歳空港から帯広空港まで航空機を使用して幕別町へ出向くことにした。当時、幕別町までは、札幌から滝川、富良野、帯広を經由しての鉄道で、結構な時間がかかった。それだけに、飛行機の方が早く、千歳空港を飛立ち、水平飛行もなく日高山脈を越えると、すぐに着陸という40分足らずの時間で帯広に行くことができた。

空港から幕別までの間、車の窓から見える風景の説明を聴きながら、頭のなかでは、幕別町らしさを主張できる素材は何か？を考え、魅力づくりへのイメージをメモっていた。

役場では、改修を担当する建設課をはじめ町長、助役などによる打合わせが始まった。教育委員会の意見は、「郷土資料館は教育施設であるから、地味であってほしい」とのこと。町長らの意見は、「目の前に温泉があり、町外や道外からの観光客も来ることから、堅苦しい施設にならないようにしたい」とのことであった。

幕別町は東に池田町と隣接し、西に帯広市と隣接している。池田町はワインとステーキと鮭とで知名度が高く、帯広市は十勝の主要都市として多数の観光客が往来する状況であった。

筆者は「十勝地方を旅する人は、観光バスや自家用車を利用する人が大半であろうし、仮に帯広から池田に移動する人は、池田で食事をとるであろうし、池田から帯広に移動する人は、帯広で食事をとるであろう。とすれば、北海道の象徴たる根室のカニ、釧路のツル、上川のクマ、十勝のサケというイメージからすれば、鯉を飼育する水槽ではなく、鮭を飼育する水槽をシンボルとして、

幕別の歩みを展開したらどうか。どうしても鯉と北海道との組み合わせでの文化を見出すことが出来ないんです」と提案した。

出席した方からの「鮭は池田で見れるんですよ」との意見に、「池田での鮭は、堰堤^{えんてい}に遡上^{そじょう}する鮭の捕獲だけで、鮭の生態について知るには十分ではないと思いますが」と疑問を投げ掛けた。

そんな意見交換の後、建物の用途変更などの手続きについて打合わせ、後日、具体的な企画書とイメージスケッチを提示することにした。

「生きた鮭を水槽で観覧させる」ということになれば、普通の考えであれば、鮭が遡上する川に隣接する場所という案になる。しかし、幕別の案は、川から離れた台地の上で、ましてや一般家庭に供給している水道水での飼育であるから、課題は山積みとなった。

★台地で育った鮭が産卵

役場のある課長からは「稚魚を池田の孵化場^{ふか}から提供してもらうのは結構だが、鮭は自分が産まれた川のおいを頼りに戻るとされるが、水槽で飼育した稚魚を近隣の川に放流したとすれば、その鮭は水槽と川との水のおいを記憶しているから混乱し、もしかしたら水槽まで飛んで来るかも知れないな」などの冗談も出たが、結果として、水量16トンの円形水槽内で鮭を飼育し、多くの来館者に十勝の自然や鮭と北海道の文化などを知ってもらうことにした。

それまでには、水道水に含まれる塩素などの薬剤を除去する装置の開発、その真水で飼育できる鮭の種類、さらには、その稚魚と成魚の供給先、水槽内での水流調整や制御など、関係する専門家の意見や資料をもとに、十分な計画と設計を行った。高台に位置する幕別温泉向かいの郷土資料館は、間口が広く、帯広方向への眺望は雄大で、夕暮れ時には、夕日が資料館の広いガラス窓に照り返り、ひと時ではあるが、温泉のロビーがオレンジ色の空間に変化する。

町長とロビーで雑談しているときに、町長が「施設の名前を何と付けたら良いだろう」と問われたので、「堅苦しくない施設との考えを生かすすれば、“幕別ふるさと館”などはどうですか？」と提言した。すると、「“ふるさと”ねえー、良さ

そうな気がする」とのこと。

結果として、提言どおりに決まり、命名者とされてしまった。

今でこそ言えるのであるが、ちょうどそのころ、歌謡曲で『北国の春』というのが流行っており、筆者も時折口ずさんでいた歌詞が瞬時に口から出てしまっただけである。

★人、鮭と出会う

昭和54年（1979）10月、町民が待ちに待った施設が開館となった。そのとき、池田の孵化場長から「もしかしたら、水槽内で成魚が産卵するかも知れない？」と耳打ちされ、担当者にビデオ愛好グループを中心とする協力会を早急に組織することを提言した。

それから、間もなく電話があり、「水槽の鮭が産卵する気配なので、数名が水槽の回りにビデオカメラを設置して録画します」とのこと、すぐに「報道機関にも連絡した方が良いと思う」と話して電話を切った。

その翌日の新聞やテレビが“日本で初めて、水槽で鮭が産卵”と題して鮭の産卵を伝えた。

ふるさと館に勤務する職員は、一躍鮭を産卵させた主人公とされ、町の名も全国に知れ渡った。

後日、ふるさと館を訪ねた時、関係者との懇談会があり、感謝の言葉をいただいたお礼として、「今度は、5月5日の節句に、鯉のぼりならぬ、鮭のぼりを町中で掲げたら、もっと子供たちが鮭と親しむかも知れません」と挨拶したら、「面白い！」との拍手で、また幕別と付き合う羽目になった。



profile

亀谷 隆 かめや たかし

1943年函館市に生まれる。武蔵野美術大学卒業。公立中学校教諭、市立函館博物館、北海道開拓記念館に勤務し2006年退職。北海道大学、北海道東海大学講師を歴任。現在、北海学園大学講師（博物館学）、特定非営利活動法人公共環境研究機構理事長、北海道博物館協会会員、北海道北方博物館交流協会評議員、地域文化開発研究会主宰など。

谷口 二郎 たにぐち じろう

1932年富良野市に生まれる。北海道大学文学部卒業。北海道庁に勤務し1990年退職。約30年にわたり北海道の自然や生活道具などをモチーフとした版画制作の活動を続けている。